九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世前期における助詞バシの用法

矢毛, 達之
九州大学大学院博士後期課程単位取得

https://doi.org/10.15017/8983

出版情報：文獻探究. 40, pp.45-51, 2002-08-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

近世前期における助詞バシの用法

矢毛達之

内　容

一　はじめに
二　中世のバシ概観
三　近世前期におけるバシの状況
四　近世前期の用法の発生理由
五　おわりに

一　はじめに

「例示強調」を表すとされる助詞バシは、その確実な使用例を鎌倉期の文献から認めることが出来、鎌倉期に続く室町期まで、日本語史上の中世を通じて、会話文・心話文によく用いられたと説かれる。[注1] 中世期のバシに関する研究も、夙くは山田孝雄氏[注2]や近年の小林芳規氏[注3]（いずれも鎌倉期）、坂詰力治氏[注4]（室町期）などの論考が挙げられる。[注5]

しかし、そのバシが近世期以降、どの様な経緯で衰退し、現代共通語では用いられない状況へと至るのかについては明らかで無い。さらに、中世期に続く近世前期の状況についても、未だに湯澤幸吉郎氏『徳川時代言語の研究』などの概説書の他には、まとまった論考が見出し難いのが実情である。[注6]

そこで、本稿では、近世前期の文献資料に見られるバシの用例を確認し、それらの例にどの様な特徴が見られるのかを検討することで、バシの衰退についての手掛かりを探ろうとする。検討の対象として特に注意するのは、バシが用いられている例文の叙述内容、またバシがあらわれる文脈・場面などである。

二　中世のバシ概観

本節では、近世前期のバシについて検討する前に、歴史的な流れを把握する意味から、まず、中世のバシがどの様に用いられていたのかを概観する。[注7]

バシの語源ははっきりしないが、おそらく係助詞ハ・副助詞シが関係すると考えられており、当初は俗語的なものだったという。[注8] 鎌倉期における用法は、次に掲げる、

1）誠アリテ行ハシシテヰタラハユカマヌ事ニテアラムスル也

（却癈忘記[注9]・上6オ）

2）次　貝ノ中ニマテトイフアル歟如何　マテハ馬蛤トモ　馬刀トモカケリ　ムマツメノ反　馬ノツメニハシニタルナラム　（名語記[注10]・五50ウ）

3）主上ハ、・・・「ヤヽ仲国、思懸ヌ事ナレドモ、若小督ガユクヘバシヤ知タル」トゾ仰ケル。　（延慶本平家物語[注11]・上585－8）

4）相構而一所ヘバシおちぬるな。一二人いかなる事にあふとも、残とゞまる者などか本意をとげざらん。

（保元物語中・為義降参の事139－10、為義→息子たち）

などの例の様に、連用語、特にヲ格の語に多く接し、会話文・心話文中で、主として仮定・推量・意志・疑問・禁止などの叙述内容を有する文表現に用いられるとされる。

しかし、中世後期になると、特にバシが用いられる文の叙述内容で前代との違いが認められる。すなわち、次に掲げる、

5）人ハ死スルヲイヤカルニ我ハヨロコフハ我カ心得ハシチカウ歟　（漢書抄[注12]・五11ウ）

6）さては然うでばし御座るか。然程に思ぃやる程ならば何しに苦労に懸りまるせうか。　（捷解新語[注13]・原刊本六19ウ・主）

7）節衣服トハ結構ナモノヲ多キタリナントハシスナソ　（史記抄[注14]・一八20ウ）

8）八島への案内者に連れてゆけ、目ばし放すな。逃げてゆかば射殺せ　（天草版平家物語[注15]・329、義経→郎党）

などの例の様に、疑問・禁止の文例に偏る訳である。この事実から、中世後期のバシの用法が、前代に比べてより限定されたものとなっていたことが窺われる。[注16]

ところで、中世末期の日本語を記述した文献であるロドリゲスの『日本大文典』には、次に掲げる、

○この副詞は或動詞の前に置かれ、時には疑問詞を伴ひ時には伴はない。又ある場合に多分といふ意を表し、他の場合には単に品位を加へるだけである。

（第二巻「副詞の構成」○Baxi（ばし）の項・土井忠生氏訳本〈三省堂〉四四九頁）

という記述がある。この記述は、時期的に接する近世前期のバシについて検討する際にも参考となりそうであるが、そのことについては、後に「四　近世前期の用法の発生理由」で触れる。[注17]

三　近世前期におけるバシの状況

本節では、前節で概観した中世におけるバシの変遷を考慮に入れつつ、近世前期の状況について検討する。

近世前期のバシについては、既に「一　はじめに」で述べた様に、湯澤幸吉郎氏『徳川時代言語の研究』に記述がある。湯澤氏は、周知の様に近松の歌舞伎・浄瑠璃作品を中心とした調査を行われ、「「ばし」は文の中に在つて意味を強めるのに用いる添意助詞であるが、一般にはあまり遣われなくなり、武家社會の人の口から出る様である」（五九六頁）としておられる。

しかし、中世のバシに関する論考に比べても、この記述のみでは不十分であろう。また、湯澤氏の記述を確かめる上でも、より広い範囲で近世前期の文献資料を検討する必要があると思われる。

そこで、以下、管見に入った近世前期のバシの用例について、幾つかの観点から考察を加えることとする。

まず、主に近松以前の文献資料から、バシの用いられた例を掲げる。ここで注目する点は、湯澤氏の調査された近松作品以外でも、バシが用いられている文献資料が少なからず見出されるという事実である。[注18]

例えば、仮名草子類には、次に掲げる、

9）狐申しけるは、「これを通らせ給ふは、たれ人にてわたらせ給ふぞ。・・・五体を見れば、あかはだかにて、虻ぞ蜂ぞ蝿ぞ蟻なんど云もの、すきまなく取り付きたり。たゞし、着る物のかたにてばし侍るか

（国字本伊曾保物語〈慶長～元和(1596－1624)頃刊〉・439－12、↓狼）

10）又狼来て、「・・・。われにいささか疵を付させ給へ。しかれども、深手ばし負せ給ふな（国字本伊曾保物語・443－9、↓犬）

11）なふいかに墓守殿、夕此御寺にて葬礼ばし有けるか

（竹斎〈寛永三～一二(1626－35)年頃刊〉・123－8、播磨侍）

12）津の国のなにはにつけてよしあしと人の身の上語りばしすな

（浮世物語〈寛文五、六(1665、6)年頃刊〉・352－9、和歌）

などの例が認められる。次に、噺本類[注19]には、以下に掲げる、

13）何と其方ハ気色ばしあしくて、ねられ候や、いかに〳〵

（一休諸国物語〈寛文(1661－73)末頃刊〉・三282－下3、一休→竹林）

14）一休こたへていはく・・・かまへて〳〵よそをばしうらやましがり給ふなと、のべ給へば（一休諸国物語・三314－上12、一休→おとこ）

15）国の守きこしめしあげさせられ、若其証拠ばし有かと御尋有けれハ

（宇喜蔵主古今咄揃〈延宝六(1678)年刊〉・五6－下4、↓俳諧師柳上）

16）此比ハ、はやそのことを打忘て、かはり番の衆中の内に、何とそ慮外ばし仕給ひたるものならし、その覚えある人は、急度仏前にて降参せられよ（杉楊枝〈延宝八(1680)年刊〉・四128－18、寄合）

17）兄三郎兵衛は・・・火事のところにふか入して、煙にむせて死に給ふか。さなくば、けがばしし給ふか

（鹿の巻筆〈貞享3年(1686)刊〉・三郎兵衛の弟達、177－4）

18）19）四郎兵衛・・・「いかに、けがばしし給ふか。是は〳〵」と申ける。三郎兵衛申けるは、わが身の事は言わずして、「名主様は息災か。大屋殿はまめなるか。わとのはけがばしせぬか」といふ。

（鹿の巻筆・178－2、4）

20）妻女枕元によりて、「いかゞ御心ばし悪しう御入候や。食事をも参らずかやうにうち臥し給ふ事、いかなれば、御心におぼしめす事もやおはしますか（鹿の巻筆・192－3、↓大黒や長兵衛）

などという例が見出される。さらに、『狂言記』正篇[注20]（万治三〈1660〉年刊）には、次に掲げる、

21）してそなたは、某に、前後についてまふは、法問ばし、してもみやうと、思やるか（宗論、法花→浄土）

22）若し山の神が来て、何かと言ふとも、頭ばかり振つて、物ばし言ふな（花子、との→くわじや）

などの例が認められる訳である。まず、これらの例を通覧すると、バシがあらわれるのはほぼ全てが会話文中であって、その担い手としては武士の他、僧侶・町人や女性など、種々の社会集団に属する人々が確認出来、特に「武家社會」に限られるものでは無いことが見て取れる。[注21]

次に、バシの用いられた文の叙述内容に注目すると、やはり疑問（本稿の例では9）・11）・13）・15）・17）・18）・19）・20）・21））・禁止（本稿の例では10）・12）・14）・22））の意味を有する例が殆どであることに気付く。疑問・禁止は、共に対他性の強い表現であるが、前

項で触れた様に、既に中世後期におけるバシの例について指摘されている事実を受け継ぐものと言えよう。

ただ、少し細かく用例を見ていくと、近世前期においてバシが用いられる文脈では、多く敬語表現が共起している事実が認められる。この偏りは、少なくとも本期の他の例示の役割を有する助詞（ナド・ナリトなど）の場合には見られないものであって、一つの特徴的傾向と言えそうである。例えば、10）の例（「深手ばし負せ給ふな」）では「～せ給ふ」という尊敬表現が共起しており（類例に14）・17）・18）が挙げられよう）、13）の例（「其方ハ気色ばしあしくて、ねられ候や」）では「～られ候」という尊敬・丁寧の複合表現があらわれている訳である。この他にも、「思やる」という尊敬表現（21）の例）、「侍る」という丁寧表現（9）の例）や、「墓守殿」・「御寺」・「御心」などという接辞による敬意表現の例（11）・20）の例）などが認められる。また、敬語表現が共起していないと思しい例は、「国の守」（15）や「との」（22））など身分の高い人物の発話か、もともと敬語の用いられない和歌の例（12））に限られるようである。ここからすると、近世前期にバシが用いられる場面としては、「武家社會」における会話の他、敬語表現の様に丁寧な言葉遣いが求められるくだりが想定されると言えそうである。

ここで、バシが用いられる場面について、既に掲げた近世前期の例から具体的に見てみることとする。例えば、

10）又狼来て、「・・・。われにいささか疵を付させ給へ。しかれども、深手ばし負せ給ふな

という例は、飢えた狼が、羊の番をする犬を自分の味方にして羊飼いを欺き、犬に害が及ばない様にして、なおかつ自分は羊を得ようとする場面のものである。狼が、主導権を持つ犬の機嫌を損ねぬため、注意を払って話しかけている苦心が見て取れる。次に、

11）なふいかに墓守殿、夕此御寺にて葬礼ばし有けるか

という例は、恋い慕っていた若衆が亡くなったという噂を聞き、衝撃を受けつつ弔いのために黒谷の墓所を訪ねた播磨侍が、墓守に問うくだりのものである。厳粛で、しかも緊張した場面での発話に、バシがあらわれている訳である。また、

20）妻女枕元によりて、「いかゞ御心ばし悪しう御入候や。食事をもの例は、夢想を気にした心配性の夫・長兵衛が、物忌として長い間床に入ったままなのを心配して、妻女が語りかける場面のものである。夫の不安を和らげようと、懇切な物言いをしようとする妻女のことばの中で、バシが用いられている。これらいずれの例も、丁寧な表現が相応しい場面・文脈であると思われ、先程の想定が強ち誤りでは無いことをあらためて確認出来よう。

四　近世前期の用法の発生理由

前節では、近世前期にバシが有していた用法上の特徴について確認した。本節では、近世前期の用法が、特に前代のそれとどの様に関連するのかを検討する。

前節で述べた様に、近世前期におけるバシは、疑問・禁止の意味内容を有する叙述形式に多くあらわれ、またその場合敬語表現と共起することが多く、主として丁寧な言葉遣いが求められる場面・文脈に用いられたと考えられる。このことに関して、既に「二　中世のバシ概

観」で掲げたロドリゲス『日本大文典』の記述が参考となろう。『日本大文典』のバシの項では、記述の後半に「単に品位を加へる」というくだりがある。このくだりの解釈については慎重を期さねばならないと思われるが、今、通説に従えば、中世末期のバシを用いた表現は「上品」なものであった、ということになる。[注22]

そうなると、中世末期に接する近世前期においても、バシを用いた表現がやはり「上品」なものとして通行していた蓋然性は大きいと言えよう。実際、敬語表現がバシと共起していることは、この蓋然性を裏付けていると考えられる。

では、何故バシを用いた表現が「上品」となり得るのだろうか。それを考える上で、安田章氏の一連の論考[注23]が有益なものの様に思われる。安田氏は、コソ…已然形の係り結びが中世末期には既に古い表現形式となっていたことを論ぜられ、丁寧な言葉遣いが要求されるくだり、例えば挨拶表現などに「古語」故の品位を有するコソの係り結びが「良ウコソ御座ッタレ。」・「忝ウコソ御座レ。」などと用いられた事実を明らかにされた。安田氏の論を援用すれば、次の様な推論が出来ようか。つまり、バシは中世期に会話文・心話文などで用いられ、その口頭語的性格故に使い古された結果、近世前期には既に古めかしい語となりつつあった。しかし、古さを伴うことからバシに或る「上品さ」が生じたため、丁寧な言葉遣いの求められる場面・文脈の中で、疑問・禁止という対他性の強い文表現を行う場合には、バシを用いてその強い対他性を和らげる用法が存した、という訳である。もちろん、直ちにコソの係り結びと「バシ―疑問／禁止」の文表現とを同列に捉えることは出来ないが、少なくとも場面に依存するかたちで古めかしい表現が用いられる例として、近世前期のバシを考えることは可能と思われる。

また、バシと同じ様に「例示強調」を担う助詞デモの勢力が近世前期に伸張しつつあり[注24]、次に掲げる、

23）24）屏風はるか、又は障子でもはることか。内証では鼻でもかむか　（難波鉦[注25]〈延宝八(1680)年刊〉・202－5、おとこ→かづま）

25）芝居はてけれバむなしくかへるもほいなし。見せ物でもミんと小芝居へ立よりしに（初音草噺大鑑〈元禄一一(1698)年刊〉六170－下4）

などの例の様に、特に敬語表現と共起すること無く用いられ始めていた事実も、この状況に関わるものであったかも知れない。

ただ、バシそのものが何時頃から「古語」化していくのか、という問題は、即座に明らかにするのは難しい。また、中世後期、バシが敬語表現と共起することが多い、などという事実も明らかにされていない。ただ、管見では、中世後期においてバシが敬語表現と共起した例は、既に「二　中世のバシ概観」で掲げた6）などの他、次に掲げる、

26）或る鹿の子父に尋ねて言うは、「いかに父御に・・・元より走らせらるるに早い事も世に並びがないと見及うでござれども、何とした子細でばしござるぞ、あの犬にばかりここかしこで追われさせらるるは、何が一つとして犬に劣らせらるる事はあるぞ？　（天草版伊曾保物語[注26]・493）

27）もしも、経ばし御存かと申事で御ざる　（虎明本狂言[注27]・腹不立、所の者二→出家）

28）なごりかほなる秋の夜の、虫のねもいとしけき、ゆめばしさまし給ふな　（虎明本狂言・わかな、謡）

29）けふよりはうちへこふとばしおもはしますな、なふはらたちや　（虎明本狂言・はなご、大名の妻→夫）

30）是も酒が申す言葉ぢや程に、然うばし思わしらるな。
（捷解新語・三19ウ・客）

などの例の様に、種々の文献資料中から少しづつ見出すことが出来る。また、これらの例の中には、28）の例の様に、バシが謡の文語的な言葉に用いられる場合や、6）・30）の例などの様に、通信使応接の儀礼的なかしこまった会話であらわれている場合も存する。従って、近世前期におけるバシの用法に繋がる流れは、既に前代の例に見え始めており、ロドリゲスはその様なバシの流れを中世末に捉えて記述していた、とも考えられそうである。いずれにせよ、中世後期のバシの諸例について、場面・文脈に即したより精細な検討を行うことが必要であろう。

五　おわりに

以上、近世前期のバシの用法について、文献資料を基に検討した。その結果、次の様な点が考えられよう。

・バシは中世期によく用いられたとされるが、近世前期・近松以前の文献資料に即して見る限り、少なく無い使用例が認められる。その際、特に「武家社會」の会話のみには限定されず、より広い社会集団内でバシが用いられていたようである。

・近世前期におけるバシの用例は、叙述形式では疑問・禁止の意味内容を有する文表現にあらわれることが殆どである。これは前代の傾向を引き継ぐものであろう。

・バシが用いられた文では、特に敬語表現との共起が目立っている。これは、丁寧な言葉遣いが求められる場面・文脈でバシが用いられていたことを示すものであって、あるいは前代から、バシが徐々に「品位」を有する語として認識されていった結果かも知れない。

実際、右の様に想定することによって、次に掲げる近松の、

31）ムヽ忠三殿におかさまはなかったが。此方はどれでばしござるぞ
（冥途の飛脚182－1、忠兵衛→忠三郎の妻）

32）五十年六十年の女夫の中も。まゝにならぬは女の習。必ずわしを恨んでばし下さるな
（女殺油地獄420－4、お吉→與兵衛）

33）與作が子とばしいやんなやサア早く御門へ出や
（丹波與作101－4、與作→息子）

などの例も、各々の場面に即したより納得の行く解釈が出来そうに思われる。

今後は、前代におけるバシのより多角的な検討や、近世後期の状況の解明も求められ、また現在の諸方言に残存するバシについても目配りする必要があろう。

注

1　『日本文法大辞典』（明治書院）の「ばし」の項（宮地敦子氏執筆）など参照。

2　『平家物語の語法』明治四四年。

3　「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号三、昭和四六年三月）・「鎌倉時代語研究の課題」（『鎌倉時代語研究』第十輯、昭和六二年五月）・「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」（『鎌倉時代語研究』第十一輯、昭和六三年八月）・「名語記の口頭語について」（『鎌倉時代語研究』第十七輯、平成六年五月）など。

4　「室町時代における助詞「バシ」について」（『小松英雄博士退官記念　日本

語学論集』三省堂、平成五年。後『国語史の中世論攷』（笠間書院、平成一一年）に再録。

5　他に中世全期を通観された論考として、安田章氏「助詞(2)」（『岩波講座日本語7文法Ⅱ』昭和五二年。後『国語史の中世』三省堂、平成八年に再録）がある。

6　この他、バシについて考察を加えた著述に、此島正年氏『国語助詞の研究』（桜楓社、昭和四一年）・堀内武雄氏「特殊な助詞の研究 ――ばし・がに・づつ・がな――」（『国文学 解釈と教材の研究』一二ノ二、昭和四二年一月）などがあるが、いずれも通史的な研究であって、特に近世期に焦点を当てたものでは無い。

7　その際、いちいち注記しないが、本文および注に掲げた先行研究を参考とした。

8　『日本語文法大辞典』（明治書院、平成一三年）の「ばし」の項（野村剛史氏執筆）では、名詞「端」が助詞化した可能性を指摘している。

9　高山寺資料叢書第七冊『明恵上人資料第二』（高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会）によった。

10　勉誠社版活字本（北野克氏編）によった。

11　勉誠社版活字本（北原保雄・小川栄一氏編）によった。

12　『続抄物資料集成第四巻』（清文堂）によった。

13　『三本對照捷解新語』（京大国文学会編）によった。

14　『抄物資料集成第一巻』（清文堂）によった。

15　江口正弘氏『天草版平家物語対照本文および総索引』（明治書院）によった。

16　山口尭二氏「係り結び体制末期の新旧連立形式 ――機能の新旧連立性――」（『京都語文』三、平成一〇年一〇月。後『構文史論考』和泉書院、平成一二年に再録）に、バシが中世後期、疑問・禁止の両表現に関わることについての詳細な検討がある。

17　また、『日葡辞書』の「Baxi.（バシ）」の項では、普通に話す場合に、時として或る語に連接するが、それによってその語の意味を改めたり、変えたりすることのない助辞。例、Qiribaxi suna.（斬りばしすな）斬るな。Nantobaxi gozaruca?（なんとばしござるか）それはどんな具合ですか。（『邦訳日葡辞書』〈岩波書店〉によった）という語釈となっている。

18　この点、『日本語文法大辞典』・「ばし」の項（注8参照）で、「（バシは）江戸時代前期には相当の使用が認められる」とあるのは頷けるところである。

19　『鹿の巻筆』以外の作品は、全て「噺本大系」（東京堂出版）によった。

20　北原保雄・大倉浩氏『狂言記新注』（武蔵野書院）によった。

21　なお、17）～19）の『鹿の巻筆』の例は、江戸の砂糖商の息子兄弟の会話である。

22　例えば注1文献や、『日本国語大辞典 第二版』（小学館）・『時代別国語大辞典室町時代編四』（三省堂）の「ばし」の項など参照。

23　「コソの拘束力」・「係結の終焉」（ともに『外国資料と中世国語』三省堂、平成二年所収）、および「コソの領域」（『国語史の中世』〈注5参照〉所収）。

24　拙稿「仮定条件句末形式出自の助詞について ――デモ・ナリトモの意味機能変化――」（『語文研究』八四、平成九年一二月）参照。

25　岩波文庫本によった。

26　風間書房版活字本（井上章氏編）によった。

27　池田廣司・北原保雄氏『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』（表現社）によった。

※用例のテクストについて、特に注記の無いものは、全て岩波「日本古典文学大系」によった。

（やけ　たつゆき・九州大学大学院博士後期課程単位取得）